

巖念寺だより

秋彼岸号/令和3(2021)年



題字 大塚婉嬢 書

菅原篤 画

●お寺のカレンダー

好評により毎年お配りしているお寺の「ほのぼのカレンダー」(二〇二二年版/写真参照)を秋彼岸にお渡しできます。ご希望の方はご参詣の際にお申し出ください(限定一五〇部です。品切れの際にはご容赦ください)。



●報恩講中止のお知らせ

「報恩講」は、浄土真宗の開祖・親鸞聖人のご命日によせて、およそ七五十年にわたって、私たちの先祖から受け継がれて来た浄土真宗でもっとも大切にされてきた法要です。しかしながら、今秋もコロナ禍の影響がまだ懸念されるため誠に残念ですが「中止」とさせていただきます。当日はお寺の者のみでお勤めさせていただきます。

●ご懇志御礼

次の方々より特別にご懇志を賜りました。心より御礼申し上げます。(六月〜七月/順不同)

- 稲林弘子様/守山利行様/伊田静江様/林充夫様
- 川村英俊様/宮崎齋様/今井田美恵子様/駒沢節子様
- 村松誠一様 その他

●ご奉仕・ご奉納御礼

次の方々からお手伝い・ご奉仕をたまわりました。心より御礼申し上げます。(六月〜七月/順不同)

- 川上よし子様/深山明様/久保島喜久子様
- 田村恵子様・洋様/武井健祐様

●子ども支援御礼

次の方々から「子どもフードパントリー(困窮する子供を抱えた家庭への支援活動)」へご寄付を賜り心より御礼申し上げます。お陰様でお檀家さんをはじめ、地域の皆様から地方の方々まで多くの皆様にご協力いただけたようになりました。

なお、今後も毎月一回のペースで、巖念寺にてフードパントリーを継続してゆく予定です。引き続き皆様からのご支援・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

(六月より七月末現在/順不同)

- 井上健治様/吉村奈都子様/倉品武文様/栄久町会女性部様/太田きよ様/小平陽一様/遠藤かほる様/西村和夫様/村山紀美子様/松永玲子様/おいもやさん興伸様/綾部晶子様/石井裕子様/中野昭子様/武石美知子様/勝木尚様/高橋恵美子様/常田幸子様/南千津子様/水谷修三様/龜山ちはる様/朝比奈明子様/増野裕子様/田原福美様/千田尚様/西岸寺様/加藤純子様/百目鬼健様/太田泉様/いづな書店様/阿部眞理様/石川裕子様/斉藤綾香様/松田令子様/山本義則様/加藤桂子様/小川洋子様/阿部秀子様/松本美智子様/長井邦浩様/久野佐和様/(株)田原屋様/(株)ロージイ・ブルー様/東京文化ライオンズクラブ様/東京浅草ロータリークラブ様

その他(匿名多数)



●秋彼岸のお知らせ

秋のお彼岸は九月二十日(月)から二十六日(日)までの一週間です。巖念寺では十八(土)よりご参詣できるように準備しております。また二十三日(木)・秋分の日は「お中日」といって、お彼岸の中心となる日です。当日は午前十一時から本堂にて彼岸法要をいたします。

秋彼岸もお盆と同様になるべく混雑を避けてご参詣ください。また、二十日(月/敬老の日)には、ひばりが丘墓苑での墓前読経を承ります。ご希望の方はお早めにお寺までご連絡ください。

(電話〇三(三三四四)九三八三)

そして、コロナウィルスの影響で墓参をやむなく控えている人のために、代わって住職がお彼岸期間中に墓前に生花とお線香を供えて「墓前読経」を承っております。ご希望の方はお寺までご依頼ください。

お彼岸という節目を私たちにとって「大切なひと時」にいたしましょう。お墓参りの際には本堂にもお参りください。 合掌

●『愚痴供養祭』朝日新聞、TBS「Nスタ」で報道

巖念寺の催し『愚痴供養祭』が朝日新聞の八月三日の朝刊に掲載されました。『愚痴供養祭』は、皆さんの「愚痴」を短冊に書いていただき、「灯笼」で照らし、お盆の送り火と共に供養することで、お互いの次の一歩を励まし合う行事です。朝日新聞の記事、「Nスタ」での紹介動画、『愚痴供養祭』の詳細については、左のQRコードからご覧いただけます。



■朝日新聞 掲載記事 (8/3)



■TBS「Nスタ」紹介動画 (8/4)



■『愚痴供養祭』詳細

巖念寺

〒111-0042 東京都台東区寿1-11-2
http://www.gonnenji.com



電話: 03-3844-9383 FAX: 03-3844-9393
E-mail: gonnenji1253@gmail.com

菩提の種をまく

今日彼岸 菩提の種をまく日かな



■松尾芭蕉 (1644～1694年)

この俳句は松尾芭蕉(一六四四～一六九四年)の作と言われています。松尾芭蕉は『おくのほそ道』という紀行文を書いたことで有名な、江戸時代前期に活躍した日本を代表する俳人です。

この句の意味は「そうだ、今日はお彼岸じゃないか。(ということ)は) 菩提になるための何か善いことでもしてみるか。」というところでしょうか。

皆さんは「お彼岸」というのは何ですか?と聞かれたら、たぶん「お墓参り週間でしょう」と答えるのではないのでしょうか。それ以上のイメージはなかなか湧いて来ないですよ。そこで今回は、松尾芭蕉のこの句を材料にして、少し「お彼岸」について考えてみたいと思います。

あるいは⑤の「禪定」というのも、心を落ち着け集中させて自己を観察することです。例えば坐禅などは、それがよく備わっている実践方法ですが、必ずしも坐禅のようなことをしなければならぬわけではないでしょう。

私たちの日頃の生活は、自分で自覚している以上に慌ただしく、心は不安定に揺れ動いて休まることはありません。やり方は人それぞれで良いと思うのですが、そういう日常の心身のあり方から意識的に少し距離をとって、自分自身を深く見つめ直してみる試みであると受け止めてみてはどうでしょうか。ですから「気分転換」とか「気の持ちよう」というのは質が違います。

また、必ずしも六波羅蜜に限定しなくても、例えば写経をしてみるとか、念仏をしてみるとか、何か良いでしょうし、お寺を訪ねて仏さんの前で静かにお参りしてみることも、広い意味で「菩提の種をまく」ことにつながることでしょう。

こうした六波羅蜜等の目的は立派で特別な人になることではありません。六波羅蜜という実践の中で訪れた「気づき」を通して、本来の自分を取り戻して、一度限りの人生を、順境の時も逆境の時も、大切に生きるようになることが目的なのです。

「お彼岸」という言葉

ところで「お彼岸」という言葉を改めてじっくり見て考えたことはあるでしょうか? ちょっと変わった言葉ですよ。「彼岸」

まずは「お彼岸」の基本情報を押さえてみましょう。

彼岸とは、日本の仏教習慣の一つで、春分・秋分の日を中日として、その後各三日間を合わせた一週間にわたり行われる仏事を彼岸会と呼んでいます。この期間中に悟りの境地(菩提)に達するための六つの徳目(六波羅蜜)を修めるのだということです。

仏教行事なのですが、仏教発祥の地・インドにはありませんでしたし、その後には仏教が伝わっているアジアの諸地域にもない。意外なことに日本にしかない独特な伝統なのです。起源としては、既に千二百年くらい前から彼岸の行事は行われていたという記録が残っています。(※「波羅蜜」とは、元のインドの言葉では「パーラミタ (Pāramitā)」といい、その発音を漢字に当てた言葉。仏になるために菩薩が行う修行のこと。「到彼岸」なども訳す)

ここで大事なことは、「お彼岸」はどうやら悟りを目指した修行するための期間らしいということ。六波羅蜜」というのが、その修行の具体的な内容です。芭蕉先生が「菩提の種をまく」と言っているのは「六波羅蜜の実践をすること」なのです。「菩提」というのは「さと(彼岸)」のことなのです。さすが芭蕉先生! お彼岸の本来の意味をちゃんと知っていたということですね。

六波羅蜜

六波羅蜜というのは、悟りの世界(彼岸)に渡るために、その手がかりとなる六種類の実践徳目のことで、次の通りです。

「迷いの世界」と言っても、別に迷子のようになつて右往左往しているというわけではありません。物事をありのままに見ることができずに、本来の自分らしいあり方を気がつかないうちに損ない、見失っている状態を「迷っている」という言葉で仏さんは教えているのです。

「私はまだ呆けていないし、理性的にしっかりと物事を判断しながら生きていくから大丈夫。ご心配なく」と内心思っているかも知れませんが、そういう人こそ御用心。私たちは誰しも程度の差はあっても、自分の限られた経験に基づいた「自分の思い(先入観)」という色のついた眼鏡を通して、周りの人や出来事を見ています。自分なりに長い間、慣れ親しんだ方法や見方で判断しながら「分かっているつもり」「知っているつもり」で過ごしています。

そういう私たちの「思いの中に閉塞して無自覚な」あり方を、仏教では「迷い」あるいは「此岸(こちら側の世界)」と表現しているのです。仏教では、人間というものは、無自覚なうちに自分の心に縛られている。本当の深い心の闇は「もう分かっている」という思いだとも教えています。そこには本当の意味での自身の成長も、苦悩からの解放もありません。

安田理深という高僧は、次のような言葉で

- ①布施 分け与えること
- ②持戒 戒律を守ること
- ③忍辱 堪え忍ぶこと
- ④精進 努力すること
- ⑤禪定 瞑想などによって心を落ち着かせ、自身をよく観察すること
- ⑥智慧 ①～⑤の実践によって智慧(正しい見え方)を体得すること

どれにしても、なかなか大変そう、私たちにはちよつと手が出せそうもないでしょうか? でも、例えば①の「布施」には「無財の七施」といいますが、もし、たとえお金や物がなくてもできる布施(分け与えることができる七種類の行為があると言います)。

- 眼施…やさしい眼差しで見ると
- 和顔施…柔和な笑顔で接すると
- 言辞施…粗暴でない、柔らかい言葉をかける
- 身施…身体を使つての奉仕
- 心施…思いやる心で接すると
- 床座施…座る場所を譲ると
- 房舎施…宿を提供すること

この他に「無畏施」といって、相手の心に寄り添って、不安な気持ちや恐怖心を和らげる手助けをするという布施もあります。これならば、どれか一つくらいやってみることができそうではないでしょうか?

また②の「持戒(戒律を守る)」についても、要するに日常生活の中で心身ともに整えようとするので、あまり堅苦しく考えなくても良いのではないかと思います。

教えてくださいました。

「悟るといっても、迷っていることを悟るのである」

何か深遠で神秘的な難しいことが分かることが「さとる」ということではないのだと。どれだけ、どんなふうに分かっているか(自身のありようが分かっているか)に気づかされて、はつきりして来ることが大切なのだ。そして「曇っているのが分かるのは、夜が明けてきた証拠です」ともおっしゃっています。

言い換えれば、それほど私たちは自分の心の眼が曇っている(迷っている)ことに気づくことは難しいのですが、それにくらかでも気づかされていくことがあれば、それは「夜明け(さとり/菩提)」への確かな歩みが始まっているのだということではないかと思えます。

お彼岸の時節。お墓参りをして亡き人のことを想い、本堂でお参りをしながら、自身の生き方にも思いをいたし、新たな「気づき」に出会うことがあれば、彼岸に渡る「六波羅蜜」の精神につながるのではないのでしょうか。

冒頭にあげた芭蕉先生の句にあるように、「菩提の種をまく、私にもできる」「六波羅蜜」をちよつと思ひ立ってみませんか。

